



新宿山吹だよりは、保護者の皆さんにも読んでもらって下さい。

古書店街の思い出

校長 永浜 裕之

過ごしやすい季節を迎え、私は先日、神田駿河台を散策してきました。高校時代は、楽器店や古本屋巡りのために、結構な頻度で訪れていた思い出の場所です。当時、大学が集う駿河台周辺は、「日本のカルチェラタン」と呼ばれていました。

「カルチェラタン」とはフランス語で「ラテン語地区」と言う意味です。もともとは、セーヌ川左岸のバリ5区から6区を指してカルチェラタンと呼ばれていました。カルチェラタンには、ヨーロッパ最古の大学の一つ、旧パリ大学をはじめ多くの教育機関がおかれ、中世以降、ヨーロッパ中から学者や学生が集まり、いわゆる学生街となっていました。彼らは異なる母国語を持っていたため、**共通の言語としてラテン語を用いて意思疎通をしていました**。ゆえに、「ラテン語地区」、フランス語で「カルチェラタン」と呼ばれます。

1960年代後期、世界的に学生運動が勃発したときも、パリの「カルチェラタン」が発火点となりました。体制に反発する学生たちは、石畳の敷石を剥がして投げ、怒りをあらわにしました。同じ頃、日米安保条約自動延長反対を掲げ、神田駿河台でも、というか、日本各地で学生運動が起きていました。当時私は7歳で、優秀なはずの大学生が、何故、そんなに怒っているのか理解できませんでした。ただ、世の中全体が騒然としていた印象が残っています。

本題からそれましたが、私が今、神田駿河台を訪れる目的の多くは、古書店巡りです。

高校生の頃は、グリム童話やイソップ物語といった、寓話がお気に入りでした。特に、絵本のような体裁で、簡単な英語で書かれた洋書は、好奇心をそそるものでした。

寓話は、教訓や知恵などの教えを楽しみながら吸収できる点が魅力です。話の中心に教えがありますが、物語が教えの「説教臭さ」を抑えてくれます。多くの方は説教に拒否感を抱いてしまうものです。しかし、寓話に記された物語なら気にならず、楽しみながら教え、教訓を見つけ出すことができると考えます。

先日、古書店街で購入した洋書の中から今回は2点紹介します。話の結びに、話から学べる教訓もあわせて紹介します。

一つ目は、「ジャナカ王とアシュタバクラ」というお話です。

昔、インドにジャナカ王という王様と、アシュタバクラという大臣がいました。王様が大臣に意見を求めると、アシュタバクラはいつもこう答えます。「王様、起きたことはすべて最高です。起こらなかったこともすべて最高でございます」。

ある日、王様が指にケガをしました。大臣はいつものように「起きたことはすべて最高です。」と言います。王様は腹が立ち、アシュタバクラを牢屋に入れてしまいます。

翌日、狩りに出かけた王様は、人食い部族に捕らえられ、神様への捧げ物として火あぶりにされることになってしまいます。覚悟を決めた王様ですが、火あぶりの前に人食い部族が王様の体を確認すると、指にキズが見つかりました。

人食い部族は、「指にキズがある奴を捧げ物にしたら大変だ!」と王様を解放しました。神様への捧げ物には、キズがあってはならないという決まりがあったのです。

この話の教訓です。私の考えを書きますが、生徒の皆さんは自分の意見を持ってください。

この寓話の主題は、「**起きた出来事を、どう捉えるか**」ということだと考えます。

良い出来事は自分の宝物となり、時折、思い出すと元気をもらえる存在です。一方で、悪い出来事は、どう考えるべきでしょうか。**過去の出来事を変えることはできません。私たちにできることは、悪い出来事に対する見方を変えることだけ**です。哲学的に言えば、「起きたことも、起こらなかったこともすべて最高である」と自分に言い聞かせ、ひとまず過去を受け入れます。そうすることで今の自分の行動を肯定し、未来に目を向けることができると考えます。過去は過去のためにあるのではなく、未来のためにあるのですから。

もう一つ、古書店街で購入した洋書の中から、イソップ寓話の有名なお話、「ロバと親子」を紹介します。

親子がロバを連れて歩いていました。すると、道ばたで水汲みをしていた少女たちが「どちらかロバに乗ればいいのに」と言います。父親はその通りだと思い、息子をロバに乗せました。しばらく行くと、今度は老人が「若者よりも年老いた父親のほうがロバに乗るべきだ」と言います。父親はそれもそうだと思い、息子を下ろして自分がロバに乗りました。しばらく行くと、子連れの女の人たちがこれを見て「子どもだけ歩かせるなんて恥知らずだ」とののしります。父親は息子もロバに乗せることにしました。しばらく行くと、若者たちが「小さなロバに2人も乗るなんて動物虐待だ」と2人を責めたてます。「それもそうか」と思った父親は、息子と2人でロバを担いで行くことにしました。町の人はこの様子を見て大笑いします。その後、不自然な姿勢を嫌がったロバが暴れだします。不運にもそこは橋の上で、暴れたロバは川に落ちて流されて死んでしまいます。

この寓話から得られる教訓は、次のように考えます。

全ての人に好かれることはできません。言い換えれば、「誰かに嫌われることを恐れてはならない」ということでもあります。自分を嫌う人がいるのは、自分が自由に生きる代償であり、自由に生きている証拠でもあります。嫌われてもかまわないと思うことは、人生を自由に生きるために必要なことです。

